

データの特性等について

令和 2 年 11 月 20 日
事務局

<データの利用・価値>

- 異なる種類のデータを組み合わせることによって、データの真実性の向上といった様々な相乗効果が認められる場合がある。
- データは、集積・解析によって、はじめて、その利用価値が生じることが通常である。
- 利用価値についての状況依存度が高いことがある一方で、そのようなデータを大量に集積し、解析することで、他社にも利用価値が生じることがある。
- 一定種類のデータが一定量確保されてはじめて有意味な知識を得ることが可能となる場合がある。ただし、大量のデータが既に得られている状況においては、それ以上のデータを追加的に得た場合の効果は遞減する場合もある。
- 同様のデータであっても、当該データの真実性の程度や取得時期からの経過によって、その用途への利用価値は大きく異なる場合がある。

データと競争政策に関する検討会報告書（平成29年6月6日）②

- ネットワーク効果が発生する商品の使用から得られるデータについては、当該商品の性能向上によって、更に多くの顧客が当該商品を使用するようになる結果、「データの集積→商品の機能向上→更なるデータの集積→更なる機能の向上」というメカニズムが働く可能性がある。

<データの帰属・所有権>

- データの複製は技術的に容易であり、データを保有し、利用できる者が先行者一者に限定されるとは限らない。（例外的に、入手経路が限定される生データもある。）
- 一般的には排他的な占有は観念できない（一方、保有者による秘匿・開示といった管理は可能）

データの特性等

業務提携に関する検討会報告書（令和元年7月10日）（P41～44）①

＜データの利用・価値＞

- 収集されたデータを解析することにより商品・サービスの質の向上が図られ、それによって新たな利用者を生むところ、直接ネットワーク効果が強く働くため、より多くの利用者を獲得することができるようになり、更に多くのデータを蓄積することが可能となる。特にプラットフォーム型ビジネスの場合は、こうした作用はより一層強まる可能性がある。
- データの量が増えれば増えるほど、また、その範囲が広がれば広がるほど、それに要する平均費用が著しく低減する可能性がある。
- データは、集積されたデータの量が一定の閾値を超えた後に初めて利用価値が生じる一方、当該閾値を超えた後は、ネットワーク効果及び規模の経済性又は範囲の経済性によって、データの集積が持続的・增幅的に向上する可能性がある。

データの特性等

業務提携に関する検討会報告書（令和元年7月10日）②

<市場の競争との関係>

- 上記のような特性のため、データを分析して新商品・サービス開発等に役立てる事業は独占化・寡占化が進みやすく、後発事業者の新規参入が困難となり、独占・寡占が維持されやすい可能性がある。

<データの帰属・所有権>

- データの帰属・所有権の在り方についての考え方はまだ確立しておらず、現状、データが
 - ①知的財産権として法的に保護されている場合
 - ②契約等により、当事者間の利用に係る権利義務が取り決められている場合
 - ③（データを保有する設備に係る所有権等を通じて）事実上、データへのアクセスや利用をコントロールできる地位にある場合

を除けば、他社がデータにアクセス・利用することは妨げられない。